



ある日の唐招提寺

—塔と燈籠との分裂—

×

小林 橘 川

奈良の市街を西へ一里ばかり、奈良電車が西大寺で別れて、郡山へ走るアノ沿線は、のさかにも、いゝ静かな田舎のけしきである、春は菜の花が、きいろく、夢のように咲きつゞき、初夏のころには麥ふくみぎりの風が爽やかに平野を走る、藪かけには、時おくれの筍が、のびくゞ皮をぬぎ、畑には豌豆の蔓が、細い支へ竹を匍つてゐる、たゞそれだけの田舎の風景である。

けれども「西の京」停留場へ下車して、田圃の中を通る並樹の白い街道へ立つと、こんな立派な街道が、ぎうしてこんなところに置き忘れられてあるのかと思はれるほゞに、整つた街道が南北に通つてゐるのである、草に埋れた並木の土堤がほこりつほいその白道を挟むで、松の嵐が、梢に高い。

私はいまその十字路上に立つ。

北すればすなはち唐招提寺、南すれば、近く薬師寺の堂塔が、松林の中に立つ。

×

はるかに東の方、奈良の市街は、なだらかなスロープの上に横はつてゐる、人間のあるところ、人

家の櫛比するところ、市街をなすところ、雲煙茫漠としてゐるのが、サスガに温かく、なつかしい、地上は人間の住むところである、人類のいさなみなしには、わが地球はいかに寂寞として、無趣味、殺風景であるであらう。

奈良の街々が、若草上の麓に、鹿の臥そべつてゐるように、あのスロープに横はつてゐればこそ、この平野にも春があり、夏があり、そして花やかさがあり、人間らしさがあるのである、所詮、私たち人間は、人間のあし跡^{あしあと}をしのび、慕ふて、さまよふてゐる旅なのである。

私の足はいつこはなしに、田圃の中を南北に貫ぬく白道を北に向つて歩むでゐた、崩れた土塀をもつたある建物には、都跡村役場の看板がかけてゐた、大宮五條の村には、菖蒲の花が、むらさきに咲き匂ふてゐた、私はこの道を、いくたびか唐招提寺へ通ふたがそれは春でなければ、夏であつた古寺巡禮のシーズン、それは私には春から夏のころでなければならぬのだ。

×

けふも私は、唐招提寺の庭に立つた。

蒸すがよりに匂ふ、草いきれのするその夜の草の野に尻を落ちつけて、名も知らぬ小草の黄ろい花に、ほんやりと夢ご、ちになつたときもある、午後の目が、美しい白い石疊の上に、金堂の柱の影を斜めに落して、それが八本も同じ間隔をもつて投影してゐるのを見るに、まるで靜かなる月夜の美しさを、まのあたりに見るようでもあつた、いくたびこ、を訪づれても、聖い、美しい、靜かな感じ

が、私に湧いて来る、全く清淨そのものだ。

私は、唐招提寺の庭がすきだ。

中門ミ、いつでも昔のまゝののではない、名ばかりの古びた門ではあるが、それを潜るミひろくミした清淨な庭が、一バイに眼に入る、松葉のばら／＼ミ、こほれ落ちた庭を、突き當つた正面に、きつしりした大食堂が立つてゐる、三尺ばかりの高さをもつた石だ、みの臺上に、がつしりした儼丈な金堂が、八本の美しい圓柱で、前面を支へられながら立つてゐる、一千二百年の長い年月を、少しの衰へも見せずに、この大建築物は、意氣盛んに立つてゐるのである。

×

古い佛教建築では、法隆寺の食堂や、五重塔や、藥師寺の三重塔や、ミり／＼にすぐれた味を有つてゐるであらう、しかし私のしらうミ、ミらしい趣味からいへば、唐招提寺の金堂におけるほゞ、美しさミ、重厚さミ、清淨さミを感じさせる建築物はない、庭園ミ金堂ミの調和がこれほゞ美しく保たれてゐる建物は、おそらくミこにもないであらう、屋根の線の美しさ、軒に走り落つる斜めの屋根の線のなだらかさ、それを受けて、きつしりミ屋根の重味を支へてゐる圓柱の美しさ、これが一千二百年の長い生命を有つた建築物だミ、さうして思はれやう。

×

その昔、鑑真和尚によつて、支那から渡つて來た軍刀カ一派の佛師が、こゝの佛像を彫刻した、そ

の刀法の荒けづりな、カづよい、それでゐた寫實的な、活々しさには、いつもふかく心を捉えられざるを得ぬ、漆も、箔も剝け落ちて、赤裸々の生地きぢのまゝに投り出された佛像、たゞへば京都博物館に陳列されてゐる藥師如來の等身大の木像を見るに、藥師如來といふ説明がなかつたなら、さうしてこれを佛像に感じよう、乳房のふくらみ、兩股の張つてゐる具合、腰の線の魅惑的なところ、脂ぎつた西洋婦人が、バスケットをさけて、市場へ買ものに出かけるような感じである、唐招提寺の佛像にはさうした實感味まじが勝つてゐる。

しかし、佛像研究については、すでに世間にそれ／＼のすぐれた先輩があることだからこゝで私のしらうごらしい説明を必要としないであらう、私は、この寺の佛像にも、藝術的な昂奮をうけとるけれども、それよりも私はこゝの金堂の建築物に、庭園に、それらを包括した自然の靜かな環境に、初々しい、ウブなよろこびを感じることを述べてたい。それが私らしくてよい。

×

當今の、若い學生たちには、興味の有てさうもない問題であらうが、私には、かうした問題が、單なるもの、すきでもなく、趣味でもなく、私の生命を打ちこんだ問題として、私の心をひくのである。

傾倒しないではおれぬ魅惑だ、禮讃しないでは居られぬ陶醉だ、佛教建築のもつ美しさに、諸君はちよつとでも觸れてみる心はないか、諸君にしてその志さへあれば、諸君の周圍は到るこゝろに、美しい建築藝術の誘惑でいっぱいなのだ、

こゝろみに知恩院の櫻馬場を上つて、三門を眺め渡したまきの、アノ心もちを味つて見たまへ、三門のそゝり立つアノ高さこ、威容こを、左右から幾百年の松の太木が、さまじくなポーズで柔らけてゐる、自然に建築物の微妙な調和が、吾々の感覚に迫つて来る、霧の朝もよい、夕映の光りに染められた景色もよい、知恩院の三門前に立つたまきの、さわやかな朗らかなよろこび、それを感じうる諸君であつたならば、私の唐招提寺の夜の静さけに共鳴を有さるゝであらう。

クドイようであるが、も一つの例證を、諸君の近くで指し示さう、それは南禪寺の森である、あの樹木にかこまれた南禪寺の堂塔である、疏水の上にかゝつたあの南禪寺橋を濟つて、兩側の並木こ、道の兩側をちよろここ走る溝の清水を聞きながら、南禪寺の境内に入つてゆく心もちは、新鮮な爽快味に溢れるであらう、うすよごれた塵の世界から脱れて、清淨な森の中へみちびかれてゆく時の、心のよろこびこ、おそろきこは、さんなであらう、そしてついに門を潜つて三門前に行きついて、高く見あげた時の光景は、ほんさうに美はしい感歎のコトバで、心が一杯になる、それは三門に樹林ミが靜かな自然の中で、黙つて融け合ひ、よろこび合つてゐる情景である。

×

始めて、奈良の三月堂で見た屋根の線の美しさは、今思ふても、こゝろのトキメキを感じる。

天平時代の御堂に、鎌倉時代の禮堂をくつゝけた三月堂の建物を、横から見渡したまきの一直線の平和な屋根の線は、何こいつても美の極致である、私はそれを、春日の森に、馬酔木あせびの白い花の香が

ほの／＼鼻をうつころ、澄み切つた空の蒼の、夕ぐれてゆくころ、飽かすその屋根の線に、ほれ／＼いつまでも見入つてゐた。

お堂の中には、天平第一の理想的傑作たる佛像のかす／＼が、靜かに安置されてゐるのである、私は光のうすぐらい中に立たせられる不空羂索觀世音菩薩の、前面に差し出された指先の柔らいふくらみ、その腕の曲線や、月光菩薩の白い塑像の合掌の、い／＼聖くも、美はしい／＼すがたを心に描きつ、いつまでも屋根の線の美しさに見されてゐるのである、しかし、唐招提寺のひろ／＼とした、靜かな庭に立つて、その金堂／＼、庭園／＼の抱合のありさまを見てから、私の心は、三月堂で感じたそのおごろき／＼は、また一種變つたおもむきで、唐招提寺の金堂を禮讃するようになった。

三月堂では、平明な、輕い感じしか受けきれないが、唐招提寺では、建築の結構規模から來る／＼の儼然たる金堂のもつ重々しさ、重力感／＼壯大感／＼が、ぎ／＼し／＼のしか、つて來るのであるが、それでゐる屋根の線の平明／＼、快活／＼、爽快／＼、安易／＼それらを一／＼にした美的情感が、あたりの風光／＼、し／＼／＼調和してゐるのである。

×

ある日の唐招提寺、私は、漠然／＼さういふより外に、はつきり／＼いふべきロトバを知らぬ、それほ／＼私はしば／＼この寺を訪づれ、この寺の庭をなつかしみ、こ／＼の金堂の石だ、みの上に立ちつくしたからである、その折々の感じが、時の前後を超越してしまつて、たゞ一つに融け合つてしまつてゐる。

るからである。

ある日、フト、私は、唐招提寺の金堂の前に、一つのいさみすほらしい石燈籠を發見したのである。それはたゞ一基、金堂の正面にもつこも人の目につき易い地位に立ちながら、一向、人々にその存在を忘れられてゐるころのたゞ一基の石燈籠を發見したのである。

私はこゝろみに、その石燈籠の傍によりそふて、そこから金堂を見渡した、そしてさらにそこから庭園を見直した、それは何ぞ、おぎろくべき石燈籠の地位であることよ、そこから金堂を見るこゝ、軒の深さが暗からず、明るからず、屋根の線が低からず、高からず、十六間にわたる長い屋根の棟を、てうぎ眞半分に等分して、靜かに簷へ下りてくる勾配の流れが、いゝ鮮明に眺め渡されるのである、そればかりではない、庭全體の結構、布置、さしかはす松の樹の梢までが、石燈籠の地位からは、動かすこゝの出来ない一つの焦點として、そこに集注されるのである、金堂と庭園とを一つにして、あらゆる方面から線を引いて見るこゝ、それはすべてこの石燈籠に集中して來るのである、全建築と、全庭園との中心がこゝにあるのである、この唐招提寺の中心焦點が、見すほらしい一個の石燈籠につながれてゐるのである。

×

電燈もなく、ガスもなく、ランプもない時代、夜の暗黒と、沈黙と、寂寞との底に、この一大伽藍が寂然として沈みゆくとき、一道の光明が、燦然として忽ち唐招提寺の庭を照したときの神秘な崇嚴

な感じはさうであらうか、そは必らず、この石燈籠の位置にあつて、その佛燈は輝やき出でねばならないであらう、金堂のみまへの、たゞ一基の燈籠こそ、燈籠の原始的信仰形態の唯一表現であらねばならぬ。

最初、たゞ一基であつた燈籠が、その後、左右二基に分裂した、それはたゞ一つの、唯一であるべき信仰の分裂だと思へられないだらうか、一つの光りが二つに分裂した、そして左右相稱式に、一対づゝに、のへられた、そして最後に、それは信仰的の意義が失はれて裝飾的な意義に墮落した、ついに築山や、庭園のそこゝに、完全に信仰なき裝飾的美觀として分散するようになってしまつた、それが燈籠の發展的運命であつた。

×

それは、てうき塔においても、同じような經過を見る。

佛教建築の、最後の形態においては、塔がその中心であつた、大阪天王寺において見るがごとく、南大門を入つて中門があり、中門を潜れば、すぐ塔があつた、塔のうしろには金堂、講堂が一直線上に建てられた、聖德太子の四天王寺造立のころは、塔が佛殿建築の中心であつた、それが法隆寺時代になるゝ、金堂と塔とが、左右に同じ重要さで、同列に置かれた、白鳳時代ではそれが藥師寺において見るように、モハヤ金堂が中心となつて、塔は左右に分裂した、東塔と西塔とが金堂を中心として左右にそれを守るように建てられた、奈良時代になるゝ、東大寺大佛殿では、塔が信仰の中心の地位

から遠く退けられて、モハヤ中門の境域外へ飛び出してしまつた、平安時代になるミ、自然の形勝に應じて、山野のあいだに分散して行つてしまつて、裝飾的、第二義的以下の存在ミして扱はれるようになった、庭園術がひらけてから、それは築山のあいだに、點々ミして點景されるたゞの裝飾物に墮落してしまつた、二元に分裂した燈籠ミ塔ミが、信仰的の意義を失つてからは、築山のあいだに落ち合ふに至つたのである、それがはかない彼等の運命であつた。

×

唐招提寺の石燈籠は、もちろん、近代のものであつて、金堂が一千二百年の歴史を有つのに比べていふにも足らぬ、みすほらしい存在である、京大の天沼博士の「石燈籠の研究」の中にも入らない貧弱な石燈籠である、しかしながらその地位、中心的地位を占めてゐるミこでは、ミこの燈籠よりも意義ぶかいものがあるミ、私には考へられるのである、もちろん、天沼博士の「石燈籠の研究」は、その發生的な原始的形態や、意義については、少しも論究されてゐないし、論究するだけの資料も遺されてゐないのであるが、私は佛教信仰の狀態から見ても、二基分裂以前の燈籠の地位について、少からぬ興味を有つものである、そのもつミも古いものは、東大寺大佛前にある金燈籠である、千二百年前の金燈籠が、儼然ミしてミに残されてゐるミこは、何よりも仕合せである、この金燈籠が、天平時代の工藝美術の進歩を語る唯一の資料であるミこは、世間の藝術家たちが、すでに十分に私たちに教へてゐてくれてゐるミこころである、しかしその地位および信仰的意義についてはこれまで何人も

闡明してくれたものがない。

×

私は、この隨筆もつかず、論文もつかぬ一文の中では、心ゆくかぎり、私の古寺禮讃をほしまゝにしたいと考へてゐるが、唐招提寺の庭に立つたまゝで、そこで疲れてしまつた、で、石燈籠のはざりで、しばらくゆつくりこくたびれた足を踏みのばしたまゝで、そのさを打ち切りたい。